『ちくま評論選』解説

24 「安楽」への全体主義　藤田省三

■凡例

1　①②…は形式段落番号。◆は、設問。　2　▽は、本文の追跡・分析。

3　▼は、読解に関する技法。　4　☆は、記述に関する技法。

■見通しと追跡

①　●抑制のかけらも無い現在の「高度技術社会」を支えている精神的基礎は何であろうか。言い換えれば、停どまる所を知らないままに、ますます「高度化」する技術の開発を更に促し、そこから産まれる広大な設備体系や完結的装置や最新製品を、その底に隠されている被害を顧みることもなく、進んで受け容れていく生活態度は、一体どのような心の動きから発しているのであろうか。「追いつき追い越せ。」から「ますます追い越せ。」へと続いて来ている国際競争心等々のほかに、少なくとも見落としてはならない一つの共通動機がそれらの態度の基底にあって働き続けている。

▽▼問い＋仮説。問い＝「高度技術社会」を支えている精神的基礎は何か。仮説＝一つの共通動機がある。その「共通動機」とは？

②　●◆1それは、私たちに少しでも不愉快な感情を起こさせたり苦痛の感覚を与えたりするものはすべて一掃してしまいたいとする絶えざる心の動きである。苦痛を避けて不愉快を回避しようとする自然な態度の事を指して言っているのではない。むしろ逆に、不快を避ける行動を必要としないで済むように、反応としての不快を呼び起こす元の物（刺激）そのものを除去してしまいたいという動機のことを言っているのである。苦痛や不愉快を避ける自然な態度は、その場合その場合の具体的な不快に対応した一人一人の判断と工夫と動作を引き起こす。通常の意味での回避を拒否して我慢を通すことさえもまた不快感を避ける一つの方法である。そうして、どういう避け方が当面の苦痛や不愉快に対して最も望ましいかは、当面の不快がどういう性質のものであるかについての、その人その人の判断と、その人自身が自分の望ましい生き方について抱いている期待と、その上に立った工夫（作戦）の力と行動の能力によって初めて決まって来るものである。◆2そこには、個別的具体的な状況における個別具体的な生き物の識別力と生活原則と智慧と行動とが具体的な個別性をもって寄り集まっている。すなわちそこには、〔読1〕事態との相互的交渉を意味する経験が存在する。

▽「共通動機」とは、A〈不快・苦痛の元を一掃したいという動機〉。これと似ているが対立するものが、B〈苦痛や不愉快を避ける自然な態度〉。この二項対立をおさえる。Aは批判され、Bは肯定されている。

◆問1「それ」とは何をさすか。

「高度技術社会」を支えている精神に共通している動機のこと。A〈不快・苦痛の元を一掃したいという動機〉のこと。

〔解答例〕「「高度技術社会」を支えている精神に共通している動機。」

◆問2「そこ」とは何をさすか。

B〈苦痛や不愉快を避ける自然な態度〉のことを指している。これを答えとしてもいいし、〈苦痛や不愉快を避ける自然な態度〉とはどのようなものか、まで説明してもいい。「その場合その場合の具体的な不快に対応した一人一人の判断と工夫と動作」という箇所を使えばいい。次の③の「個別的な苦痛や不愉快に対してその場合その場合に応じてしっかりと対決しようとする」というのも同意だ。

〔解答例1〕「苦痛や不愉快を避ける自然な態度。」

〔解答例2〕「その場合その場合の具体的な不快に対して、一人一人が判断し工夫してそれらを避ける態度。」

③　●それに対して、不快の源そのものの一斉全面除去（根こぎ）を願う心の動きは、一つ一つ相貌と程度を異にする個別的な苦痛や不愉快に対してその場合その場合に応じてしっかりと対決しようとするのではなくて、逆にその対面の機会そのものを無くしてしまおうとするものである。そのためにこそ、不快という生物的反応を喚び起こす元の物そのものを全て一掃しようとする。そこには、不愉快な事態との相互交渉が無いばかりか、そういう事態と関係のある物や自然現象を根こそぎ消滅させたいという欲求がある。恐るべき◆3身勝手な野蛮と言わねばならないであろう。

▽傍線がA、二重傍線がBの内容。

◆問3「身勝手な野蛮」というのはなぜか。

本文に直接的な説明の言葉はない。だから、もし、「いいじゃないか。不快（ウザい）なものは根こそぎ消滅させれば！」と考えている人間がこれを読めば、なぜ、書き手が野蛮と非難しているのか、わからないかもしれない。まさに悲劇だが…

☆なぜ型→どのように型を使うと、「身勝手な野蛮」とはどういうことか、問いの形が変わる。「身勝手」とは、自分だけよければ他者はどうなってもいいという態度のこと。「野蛮」とは、理性的でなく、粗野、暴力的であるさまを非難するときに使われる。これは、本文に基づくというより、語義である。さらに粗野とは、相手の感

情を無視する荒っぽい態度をいう。**☆傍線部を延長**し、**主語を補う**と、「〈不快な事態を招くものをすべて消滅させようとすること〉は、〈自分だけよければ他者はどうなってもいいという暴力的な態度である〉」といいかえられる。

〔解答例〕「不快な事態を招くものをすべて消滅させようとすることは、自分だけよければ他者はどうなってもいいという暴力的な態度であるから。」

④ ●かつての軍国主義は異なった文化社会の人々を一掃殲滅することに何の躊躇も示さなかった。そして高度成長を遂げ終えた今日の私的「安楽」主義は不快をもたらす物全てに対して無差別な一掃殲滅の行われることを期待して止まない。その両者に共通して流れているものは、恐らく、不愉快な社会や事柄と対面することを怖れ、それと相互的交渉を行うことを恐れ、その恐れを自ら認めることを忌避して、高慢な風貌の奥へ恐怖を隠し込もうとする心性である。

▽傍線部、言い得て妙。世には声高に、特定の対象を否定する輩がある。その心性の奥にある、この「その恐れを自ら認めることへの忌避」という点については、記憶しておくべきだろう。

⑤ ●今日の社会は、不快の源そのものを追放しようとする結果、不快のない状態としての「安楽」すなわちどこまでも括弧つきのただただ一面的な「安楽」を優先的価値として追求することとなった。それは、不快の対極として生体的で不快と共存している快楽や安らぎとは全く異なった不快の欠如態なのである。そして、人生の中にある色々な価値が、そういう欠如態としての「安楽」に対してどれだけ貢献できるものであるかということだけで取捨選択されることになった。「安楽」が第一義的な追求目標となったということは◆そういうことであり、「安楽への隷属状態」が現れて来たというのも又◆4そのことを指している。休息すなわちひと時の解放と結びつくのであって、楽しみや安らぎなら隷属状態とは結びつかない。

▽③と同様、傍線がA（否定的安楽）、二重傍線がB（肯定的安らぎ）の内容。

◆問4「そのこと」とは何をさすか。

「そういうこと」＝「そのこと」と補助線を引くといい。指示内容は、直前の一文「人生の中にある色々な価値が、そういう欠如態としての「安楽」に対してどれだけ貢献できるものであるかということだけで取捨選択されることになった」。

〔解答例〕「人生の中にある色々な価値が、不快のない状態としての「安楽」にどれだけ結びつくかということだけで取捨選択されるようになったこと。」

⑥ ●むろん安楽であること自体は悪いことではない。それが何らかの忍耐を内に秘めた安らぎである場合には、それは最も望ましい生活態度の一つでさえある。価値としての自由の持つ第一特性である、他人を自由にし他人に自発性の発現を容易にするからである。しかし、ある自然な反応の欠如態としての「安楽」が他の全ての価値を支配する唯一の中心価値となって来ると事情は一変する。それが日常生活の中で四六時中忘れることのできない目標となって来ると、心の自足的安らぎは消滅して「安楽」への狂おしい追求と「安楽」喪失へのいらだった不安がかえって心中を満たすこととなる。

▽▼しかし、を挟んだ前後の対照をつかむ。B〈心の自足的安らぎ〉〈他人を自由にし他人に自発性の発現を容易にする〉／A〈不快のなさだけを求める安楽〉〈狂おしい追求・喪失へのいらだった不安〉。

⑦ ●こうして能動的な「安楽への隷属」は「いらだつ不安」を分かち難く内に含み持って、今日の特徴的な精神状態を形づくることとなった。「安らぎを失った安楽」という前古未曾有の◆5逆説がここに出現する。それは、「ニヒリズム」の一つではあっても、深い淵のような容量をもって耐えかつ受納していく平静な虚無精神とは反対に、他の諸価値をことごとく手下として支配しながらある種の自然反応の無い状態を追い求めて止まないという点で、〔読2〕全く新しい新種の「能動的ニヒリズム」と呼ばれるべきであるのかも知れない。

▽「ニヒリズム」は、何にも意味とか価値を認めない精神状態をいう。ここでの〈よいほう〉のニヒリズムは、特権的に価値をもたらす存在（例えば神）を否定し、それでもこの生やこの世界をどうかして引き受けていこうとする態度を指していると思われる。一方、〈わるいほう〉の新種のニヒリズムは、いろんな価値について、本気で認めはしないが、それらを利用して不快のない状態を追求する。

◆問5 どのような点で「逆説」なのか。

☆頻出「逆説」の説明。「逆説」の説明はよく出る。とりあえず**「（一見）～なのに、（じつは）～であること。」という説明の型を使う**といい。

「今日の安楽は、安楽であるのに、じつは安らぎを失っているという点。」

これをもとにして、内容を補充せよ。今日の安楽は、～な安楽であり、安楽であるのに、～という安らぎを失っているという点。

〔解答例〕「今日の安楽は、不快のなさだけを追求し、喪失へのいらだった不安を伴う安楽であり、安楽であるのに、心が自足した安らぎを失っているという点。」

⑧ ●安らぎを失って動き廻る「安楽への隷属」という尋常事ではない精神状態が私たちの中に定住した時、それがタダ事ではないだけに、その定住も又タダでは済まないはずである。誘致料はどれ程であるか。私たちが精神の面で払っている損失（コスト）は一体何なのであろうか。先駆的な動物行動学者の注意深い人間観察が教えてく

れているところによると、そのコストは「喜び」という感情の消滅であった。
▽「安楽への隷属」の代償＝「喜び」という感情の消滅。

⑨ ●必要物の獲得とか課題や目標の達成とかのためには、もともと避けることの出来ない道筋があって、その道筋を歩む過程は、多少なりとも不快な事や苦しい事や痛い事などの試練を含んでいるものである。そしてそれら一定の不快・苦痛の試練を潜り抜けた時、すなわちその試練に耐え克服して道筋を歩み切った時、その時に獲得された物は、単なる物それ自体だけではなくて、成就の「喜び」を伴った物なのである。そうして物はその時十分な意味で私たちの関係する物として自覚される。すなわち相互的な交渉の相手として、経験を生む物となる。「大物主の神」とも呼ばれ、「物語り」とも称せられて来た、◆6そういう「物」は、明らかにただの単一な物品それ自体ではなくて、様々な相貌と幾つもの質を持って私たちの精神に動きを与える物なのであった。そして成就の「喜び」はそうした精神の動きの一つの極致であった。

◆問6「そういう『物』とはどのようなものか。

「物」で▼**キーワード検索**する。不快や苦痛を克服して獲得する物。「喜び」をもって獲得する物。相互的な交渉の相手として経験をもたらす物。**☆主語意識をもって**考えてほしい。それは、私たちが、獲得する対象であるが、同時に逆に、それらの物は、私たちに何かを与えてくれる。この部分をきちんと表現したい。

〔解答例〕「私たちが不快や苦痛を克服した結果、喜びとともに獲得する物だが、また、相互的な交渉の相手として私たちに経験をもたらしてくれるような物。」

※努力して、金メダルとか賞状とかを獲得する、という場面を思い浮かべてみよ。メダルはたしかに単一な物品というだけの「物」ではない。また、自分で育てて収穫した農作物のようなものを思い浮かべよ。その経験は私たちに何かを与える。

⑩ ●それに対して、ただ一つの効用のためにだけ使われる場合の物は、平ぺったい単一の相貌とたった一つの性質だけを私たちに示すに過ぎない。それは一切の◆7包含性を欠いている。「使用価値」の極限の形が恐らくそこにあり、私たちはそれに対しては使いそして捨てるほかない。それと相互的な交渉をする余地はもはやない。完成された製品によって営まれる生活圏が経験を生まないのはその事に由来する。
▽〈消費〉といいかえてもいい。冷凍食品を買い、チンして、食う。以上終わり。「国公立大古文短期集中講座」を買う。合格という効用を得る。以上終わり。

◆問7「包含性」とはどのようなことか。

☆傍線部を延長すれば、「一切の包含性を欠いている」とはどういうことか、と問い直せる。これは直後に「相互的な交渉をする余地がもはやない」とあるのと同じことだろう。

〈包含性＝相互的な交渉をする余地〉とみなせば、⑨段落に答えを見出せる。
「相互的な交渉の相手として、経験を生む物」＝「様々な相貌と幾つもの質を持って私たちの精神に動きを与える物」
☆主語意識をもって、主語を足すべき。

〔解答例〕「獲得の対象が、様々な相貌と幾つもの質を持って私たちの精神に動きを与える性質を持っていること。」

⑪ ●そうして、そういう単一の効用をもたらす「物」を手に入れた時、その事が私たちにもたらす感情は、ある種の「享受」の楽しみである。むろん享受の楽しみ自体は決して悪いことではない。それが、目まぐるしい使い捨ての高速回転などとは無関係な落ち着いた平静を伴っている限り、それは大切な生活態度の一つなのである。そこには物事に対するゆったりとした味わいの態度が、つまり一つの経験的態度が生まれる。当然、時間の過剰な短縮も過剰な濫費も又そこにはない。だから次の仕事への用意が次第にその中で蓄積される。そのようにして享受の楽しみは、次に予想される苦労を含んだ道筋を自ら進んで歩もうとする態度と接続される。それがen-joyと呼ばれて広い意味での悦びの一つとされているのも、こうして見るとき当然のこととして納得される。そうしてその継続線上の一方の極みに克服の「喜び」が存在する。
▽使い捨てしないときの「享受の楽しみ（A）」。それは、苦しみ・喜びとともにある。そして、継続していく。

⑫ ●しかし、次々と使い捨てていく単一効用を「享受」する楽しみは、そういう自然な接続の内にあるものではない。事の性質から見て当然のことであるが、それはただ一回的な「享受」に過ぎない。次の瞬間にはまた別の一回的な「享受」がやって来るだけである。時間は分断されて何の継続も何の結実ももたらさない。かくて苦しみとも喜びとも結合しない享受の楽しみは、空しい同一感情の分断された反復にしか過ぎない。その分断された反復が、激しく繰り返されればされる程空しさも又激しい空しさとなってますます平静な落ち着きから遠ざかっていく。ここにも又「能動的ニヒリズム」が顔をのぞかせているようである。
▽使い捨てするときの「享受の楽しみ（B）」。苦しみ・喜びと結びつかない。継続せず、分断の反復のみ。**▼対比的に整理しつつ読む。**

⑬ ●しかも、抑制なく驀進する産業技術の社会は、即座の効用を誇る完結製品を提供し、その即効製品を新しく次々と開発し、その新品を即刻使用させることに全力を尽くして止まない。そして私たちの圧倒的大多数が、この回転の体系に関係するどこかに位置することをもって生存の手段としている。――という社会的関連が在るのだから、分断された一回的享受の反復がいよいよめまぐるしく繰り返されていく傾向は、

何らかの意識的努力がない限り停どまるところを知らないはずである。
▽新型スマホが出た。買えるから買う。それだけ。獲得の苦しみなんてない。やったゾ、なんて、はしゃぐもんでもない。ああ、こんな機能があるんだ。ともだちに見せる。あーいーねー。いーだろ。おれももってるよ。そーか。それだけ。また半年したら新型出るよ。買えたら買うよ。それだけ。この新型売れたら、一時金出るかもな。だって、おれ、この会社で働いてるんだ。非正規だけど。

⑭ ●そうである以上、一定の苦痛や不快の試練に耐えてそれを克服したところに生まれる典型的な「喜び」は、すなわち〔読３〕歓喜の感情は、その存在の余地を大きく奪われているのである。
▽【停止と見渡し】全体としては、分析論。⑬の「何らかの意識的努力が必要だ」というのが、かろうじて〈主張〉ということになる。
苦痛回避／苦痛と闘う、という対立軸には、私たちの文明のもたらした根本的な課題が顔をのぞかせている。本論では、苦痛回避の安楽主義が批判されていたが、例えば、闘病といった場面においてこの問題をどう考えるか。筆者はよい／わるいの二つに分けているが、考えようによれば、文明とはすべて苦痛回避の本質をもっており、その先端的な部分を私たちは現在見ているにすぎないとも考えられる。
はたして、意識的に苦痛を取り込む、といったことが私たちに可能なのか？
しかし、少なくとも、ここでいわれている「安楽への全体主義」が突き進むとどうにもならなくなる領域があることは確かだ。スピード水着を着たらかんたんに新記録が出ますよ、といったところにスポーツの意義は見出せるだろうか。なんとか診断テストに基づきなんとかソフトでドリルをやれば、合格保証しますよ、といったところに教育の意義は見出せるだろうか。私たちは、そこへどんどん吸い寄せられていく。
「安楽への全体主義」の罠を侮ってはいけない。

■**読解問題１**「事態との相互的交渉を意味する経験」とはどのようなことか、説明しなさい。目安八十字以内。
☆傍線部延長。一つ前の文と並べてみる。
「そこには、個別的具体的な状況における個別具体的な生き物の識別力と生活原則と智慧と行動とが具体的な個別性をもって寄り集まっている。」
「そこには、事態との相互的交渉を意味する経験が存在する。」
「そこ」の内容を代入。
「その場合その場合の具体的な不快に対して、一人一人が判断し工夫してそれらを避ける態度には、個別的具体的な状況における個別具体的な生き物の識別力と生活原則と智慧と行動とが具体的な個別性をもって寄り集まっている。」
「その場合その場合の具体的な不快に対して、一人一人が判断し工夫してそれらを避ける態度には、事態との相互的交渉を意味する経験が存在する。」
「安楽への隷属」がもたらす精神状態をニヒリズムと呼んでいるわけだが、もう一度☆問いを立て直そう。**☆切り身**にして、①どこがニヒリズムなのか②どこが能動的なのか③どこが新種なのか。
まず、どこがニヒリズムなのか。積極的な意味や価値を認めないのがニヒリズムだった。人間は無から生まれ、結局、無に帰るだけ。来世に極楽浄土に生まれるとか、神の国が実現するとか、そんな話は信じない。ニヒリズムとは、まずは、否定する態度である。では、「安楽への隷属」では何が否定されているか。「不快・苦」である。ただし、筆者の観点では、不快や苦は、それを乗り越えるときに「喜び」という価値をもたらす（⑨）。が、「安楽への隷属」では、そういった〈苦＋喜び〉という生の手触りそのものが否定されている。生の実感の否定という点で、「安楽への隷属」はニヒリズムなのである。

けるの態度には、事態との相互的交渉を意味する経験が存在する。」
このように並べてみると「事態との相互的交渉」の中身が見えてくる。また、問七で「相互的な交渉」の内容を「獲得の対象が、様々な相貌と幾つもの質を持って私たちの精神に動きを与える」ことだととらえておいた。「相互」というのは二つの方向性があるということだが、それは、
①「その場合その場合の具体的な不快に対して、一人一人が判断し工夫してそれらを克服していこうとする」
②「それらの具体的な体験から様々なことを学んでいく」
という二つである。②の部分の表現は、いろいろありえる。
〔解答例〕「一人一人が、一つ一つの具体的な不快に対して、判断し工夫し、克服していこうとする中で、それらの具体的な体験から様々なことを学んでいくということ。」

■**読解問題２**「全く新しい新種の『能動的ニヒリズム』」とはどのようなことか、説明しなさい。目安一二〇字以内。
筆者による新しい概念の提示である。いわば、論の〈本丸〉。表面上の字面の操作だけでなく、**☆実感をもって理解せよ**。

> **☆実感をもって理解**。説明記述の命は、結局、腑に落ちた理解ができているかどうかにかかっている。いろんな技法を紹介してきたが、芯のところでわかっていない場合は技法も使えない。どうやれば実感をもって理解できるのか。それには、諸君の知的能力の総力を注ぐしかない。体験及び知識の総体を賭けて、テキストの意味するところを反芻し、仮説を立て、見渡し、検証する。「ああ、そういうことか」という思いが来るまで！　技法を超えた技法である。

「安楽への隷属」がもたらす精神状態をニヒリズムと呼んでいるわけだが、もう一度☆問いを立て直そう。**☆切り身**にして、①どこがニヒリズムなのか②どこが能動的なのか③どこが新種なのか。
まず、どこがニヒリズムなのか。積極的な意味や価値を認めないのがニヒリズムだった。人間は無から生まれ、結局、無に帰るだけ。来世に極楽浄土に生まれるとか、神の国が実現するとか、そんな話は信じない。ニヒリズムとは、まずは、否定する態度である。では、「安楽への隷属」では何が否定されているか。「不快・苦」である。ただし、筆者の観点では、不快や苦は、それを乗り越えるときに「喜び」という価値をもたらす（⑨）。が、「安楽への隷属」では、そういった〈苦＋喜び〉という生の手触りそのものが否定されている。生の実感の否定という点で、「安楽への隷属」はニヒリズムなのである。

次に、どこが能動的なのか。⑦段落の初めに、「能動的な『安楽への隷属』」とある。隷属とは、奴隷のように何かに従うことであり、能動的ということとはほんとうは矛盾する。どういうことか。その内容は⑥にあった。

「ある自然な反応の欠如態としての「安楽」が他の全ての価値を支配する唯一の中心価値となって来る」

不快や苦に直面し、それを何とか乗り越えていくというのが自然な反応である。それを予め避けていくのが、ここでいう「安楽」（不快のない状態（⑤））。例えば、害虫や害獣が襲ってくる、うっとうしいが、網や縄を張って対応する。これが自然な反応だとすれば、薬によって根こそぎ殺してしまえ、というのが「不快のない状態」を求める態度である。

現代人は不快のない状態でしか生きられないようになっているという点で、〈受動的〉である。しかし、逆の見方をすれば、現代人は不快のない状態を求めて行動し続ける点で、〈能動的〉である。これが能動的かつ隷属ということの意味である。

三点め。新種とはどういうことか。従来のニヒリズムとは違っている点で。従来のニヒリズムは、生の無意味さに耐え、受け入れていこうとする思想であった（⑦）。しかし、「安楽への隷属」は、一、二点めで見たように、それとは違った特質をもっている点で新しい。※ニヒリズム＝『現キー』参照。この世に真理や正しさや意味なんてない、という考え方。

以上の吟味を、**☆解答の型を作って**仕上げていく。「安楽への隷属」は、～という点でニヒリズムだが、従来のニヒリズムとは違い、～という特徴を持っているということ。

〔解答例〕「『安楽への隷属』は、苦とそれに伴う喜びという価値を否定する点で一種のニヒリズムだが、従来の、生の無意味さを受け入れる受動的なニヒリズムとは違い、不快のない状態を求めて行動し続ける点で能動的な特徴を持っているということ。」

■**読解問題３**　なぜ「歓喜の感情は、その存在の余地を大きく奪われている」のか、まとめなさい。目安二〇〇字。

☆なぜ～どのように型。どのように、私たちは、歓喜の感情を喪失していくのか。喜びの喪失について書かれていた段落はどこか。⑧から最後の⑭である。この問いは、結局この本文後半部の要約に等しい。

⑧私たちは、歓喜の感情を喪失している。

⑨歓喜の感情は、苦を乗り越えて獲得される。歓喜の感情を与える物は、様々な形や質をもっている。

⑩⑪享受の楽しみは、一つの効用しかない物から得られる。一つの効用しか与えない物は、一つの形や質しかもっていない。

⑫一つの効用しかない物の使い捨ては、歓喜の感情に結びつかない、バラバラの楽しみの反復しかもたらさない。

⑬現代の産業技術の社会は、一つの効用しかない物の使い捨てを加速させている。私たちは、その社会の回転に依存して生存している。

これらを、論理的につないでいく。構成をメモする。

・苦を乗り越えた経験→歓喜／・単一効用→バラバラの楽しみのみ。この対比。

・産業社会→単一効用のみ。

・だから、私たちは、歓喜を得られない。

〔解答例〕「歓喜の感情は、苦を乗り越えて獲得され、私たちに様々な経験を与える。一方、一つの効用しかない物の使い捨ては、歓喜の感情に結びつかず、分断された楽しみの反復しかもたらさない。現代の産業技術の社会は、一つの効用しかない物の使い捨てを加速させている。その結果、私たちは、効用を消費することでしか生存できなくなり、苦を乗り越えて歓喜を獲得することがむずかしくなっている。」

■論述への挑戦

問。「安楽への隷属」の実例をあげて、考えるところを論じなさい。八百字以内。

■二百字マス目